



第46回理事会開催

助成対象として190件を決定

去る10月1日(木)、当財団の第46回理事会が都内にて開催された。今回は助成対象の審議が中心となり、結果として総計190件、総額4億5,434万円の助成を決定した。主な内容は下記のとおり。なお、助成金の贈呈式を、同21日(水)に都内のホテルにおいて行った。

●研究助成は68件、2億70万円

本年度の申請総数は、昨年度に比べてやや減少はしたものの737件。総額にして約21億円となるため、全体としての倍率は10倍を越える厳しいものとなった。

その中で、発想の独創性や方法の適切さ、社会的な意味の大きさ、および民間財団として積極的に取り組む課題かどうか、などという点で高い評価の得られたもの68件が助成対象に選ばれた。(P.2~5参照)

●活動記録助成は13件、2,160万円

この「市民活動の記録の作成および出版に対する助成」については、「記録の作成」で申請総数56件中11のグループが、また「記録の出版」では、同じく6件中2つのグループが助成対象となった。(P.6参照)

●国際助成は88件、1億2,719万円

東南アジア諸国などにおける各地の固有文化の保存と振興に関する(現地の人々による)研究や事業に重点をおいた当プログラムでは、88件が助成の対象となった。

この内、17件(合計:503万円)については、本年度より新たに開始された「インドネシア若手研究者奨励研究

おもな内容	
◆研究助成選後評	2
◆研究助成対象一覧	3~5
◆活動記録助成選後評・対象一覧	6
◆国際助成対象一覧	7~10
◆「隣プロ」助成対象一覧、他	10~11
◆新刊紹介	11~12
◆最近の報告書から、他	12

助成」の助成対象。(P.7~10参照)

●「隣人をよく知ろう」プログラムは17件、5,772万円

今回は翻訳出版促進助成のみで、日本向け8件、東南アジア向け6件、東南アジア相互間3件が各々助成の対象となった。(P.10~11参照)

●東南アジア研究英訳刊行助成は1件、1,453万円

本プログラムは、国際助成活動の新しい方向性を探るための試行的な助成として本年度より開始されたもので、コーネル大学東南アジアプログラムの「日本人による東南アジア研究成果の英訳刊行」が助成の対象となった。(P.11参照)

●その他

特別研究助成、フォーラム助成及び日タイ修好100周年記念特別助成の対象に各々1件、合計3,260万円が決定した。また、日タイ修好100周年記念事業に関連し、これまでのタイへの助成活動や日タイ両国の相互理解に貢献したことにより、9月26日(土)に外務大臣表彰を受けたが、理事会の席上その報告も行われた。

日タイ修好100周年記念ワークショップ・シンポジウム開催

日・タイ両国の修好100周年を記念し、「日タイ交渉史に関する史料について」をテーマとする研究ワークショップ(非公開)と「タイ美術史—寺院壁画と石造建築を中心として」と題する公開シンポジウムが、国際文化会館との共催により、各々9月4日(金)・5日(土)に同会館(東京・六本木)にて開催された。

公開シンポでは、タイの研究者3名の熱気あふれる報告と日本側研究者のコメントに約160名の出席者が耳を傾けた。(これらの概要報告書は現在編集中)



▶報告を行うソン・シマトラン氏



1987年度研究助成の 選考を終えて

研究助成選考委員長
加藤 一郎

昨年度に比べていくらか減少はしたものの、今年も737件という多数の申請が寄せられた。申請金額では約21億円になるから、全体としての倍率は10倍を越える。それぞれの申請者にとってはいずれもかけがえのない研究計画であることは間違いない。それぞれの申請書からは研究者の切々たる気持ちがよく伝わってくる。それらの中から十分の一を選ぶということは、大変に心の痛む思いがするものである。この思いは、審査に当たられた全ての選考委員の共通の気持ちでもあろう。

さて結果として選ばれたのは68件。個人奨励研究（第Ⅰ種）が27件、予備的研究（第Ⅱ種）が26件、総合研究（第Ⅲ種）が15件である。これら各々の推薦理由については、各委員で分担執筆し、採択された方々に配っているので、ここでは総括評として各研究種別ごとの特徴を簡単に述べておくことにしたい。

●個人奨励研究（第Ⅰ種）について

若い研究者の将来の可能性に賭けるというのが、いわばこの個人奨励研究の趣旨である。そういう観点から、選考のしかたは他の種別に比べかなり思い切ったものになった。どこから見ても問題ないというものよりも、かなりの問題や疑問を含みながらも（ということはある委員からは反対があっても）どこかに強い個性的な魅力のあるもの、見方や切口に若々しい意欲がみなぎっているものを積極的に取りあげた。その結果27件が採択になったわけで、申請数310件に対し、採択率は8.7%ということになる。

採択された研究者の多くは、国内外の大学の若手研究者や大学院生であるが、フリーの写真家や小学校の教職にある人、民間の機関に所属する人などもあり、申

請者の資格を問わないというこの研究助成プログラムの特徴をよく示している。

●予備的研究（第Ⅱ種）について

学際的・職間的・国際的な総合研究の予備研究に助成する第Ⅱ種研究では、選考は第Ⅰ種に比べかなり厳しいものになった。396件の申請に対して採択は26件であるから、採択率は6.3%になる。発想に独創性があり攻め方が的を射ることが必要なことは勿論であるが、社会的な意味が大きいかどうか、民間財団として積極的に取り組む課題かどうかといった点が議論された。予備研究といっても、これだけ倍率が厳しくなると、やはりかなり考え抜かれたものでないと最後まで残らないことになる。

採択となったものには国際共同研究が多く、26件中16件を占めているが、今年度は特に中国や韓国との共同研究が目立った。中国関係が4件、韓国関係が3件あり、いずれもその内2件は代表者が中国側や韓国側の研究者である。それぞれの国での最近の研究環境の動きが感じられるようで興味深かった。

また今回採択されたものには、これまでに成果をあげた助成プロジェクトの新たな展開として計画されたものも3件ほど含まれており（No.33, 41, 51）、ひとつの特徴となっている。

●総合研究（第Ⅲ種）について

総合研究は、これまでの予備的研究（第Ⅱ種）を経て展開するもので、30件の申請があり15件が採択となっているから、採択率は50%となる。数字的には楽に見えるが、選考は3つの種別の中でもっとも厳しかったと言ってよいであろう。選考委員の方もこれまでの報告書など大部の資料に目を通さなければならなかった。

採択になったものの中には、昨年度の助成からすぐに継続したもの以外に、一昨年度から一年おいて継続になったものもいくつかある。研究の性格によっては連続した助成がふさわしいが、複雑なフ

ィールド調査を伴うものは予備研究をじっくりまとめ、十分な検討と考察の時間をとった上で総合研究に臨む方がよい成果を生むこともある。選考に当たってはこれまでに提出された中間報告書や最終報告書に丹念に目を通し、以上のような点についても十分に議論したつもりである。なお、今回採択になったものの内1件（No.54）は、第3回研究コンクールの受賞研究からの展開である。

第Ⅲ種研究は助成期間を2年まで認めているため、いずれも申請金額の規模が大きかった。しかし採択件数をこれ以上絞り込むこともできず、また予算の都合もあるので、それぞれの申請者に研究費をかなり節減していただくことになった。申請の意図を損わないようにできるだけ配慮したつもりではあるが、相当な無理を強いることになったグループがあるかとも思う。お許しいただきたい。

◇ ◇ ◇

以上、簡単に各研究種別の特徴を述べた。最後に全体的なことについて触れておきたい。

68件の採択された研究の申請者の中には、外国籍の人14名が含まれる。その国籍は、中国（3）、韓国（2）、インドネシア、フィリピンなどの近隣諸国を始め、アメリカ（2）、ギリシア、オランダ、西ドイツ、イスラエル、コロンビアと世界の各地に及んでいる。また日本国籍の研究者で海外に居住する人もかなり含まれている。このトヨタ財団の研究助成事業は日本における日本の研究者からの申請が多く、申請書も全て日本語で書くことになっている。それでもこれだけの国際的な広がりが出てきている。このような、自由度の高い民間の助成活動を一つの刺激として、わが国の研究活動がより一層世界に開かれたものとなることを期待したい。



1987年度 研究助成対象一覧

個人奨励(第I種)研究 [27件; 4,230万円]

注 研究題目末尾の継-2(3)(4)は、継続2(3)(4)回目を示す。
助成金額下の()は、助成期間を示す。無記入は1年間。

No.	研究題目	研究者名	研究者所属	助成金額(万円)
1	思考と行動における言語表現とその談話構造分析 — マレー語に根拠する言語体系の談話構造的分析 —	佐藤 宏文	マラヤ大学マレー研究科	180
2	北極圏油田開発により変貌しようとするカリブーの季節移動とその狩猟生活に関わるアラスカ原住民の研究と記録(継-2)	星野 道夫	(写真家)	200
3	有機農業運動の展開と農村コミュニティ形成に関する実証的基礎研究	青木 辰司	秋田県立農業短期大学	180
4	近世農村社会における「間引き」・墮胎の心性史的研究 — 土佐藩領内を中心に —	太田 素子	高知大学教育学部	60
5	土地法制の総合的検討 — 総合的都市整備モデル条例の制定へ向けて —	宇賀 克也	東京大学法学部	190
6	アメリカにおける「都市型」連邦補助金の展開と都市財政	川瀬 憲子	大阪市立大学経営学研究科	140
7	バングラデシュのイスラム教徒村落社会における伝統的産婆 Dai と近代化	西川 麦子	大阪大学人間科学研究科	190
8	日本の家族の食生活における主婦の役割りに関する研究 — インドネシアの栄養改善計画立案のために —	ワティ・イフヌディン	インドネシア大学医療人類学研究科	140
9	人間における育児のあり方に関する比較行動学的研究 — 哺乳および離乳における母子相互作用を中心として —	根ヶ山 光一	武庫川女子大学文学部	170
10	中南部アフリカ・ウッドランド帯、焼畑農耕民における伝統的生活様式の変容と近代化の構造 — 常畑化をめぐる・とくに女性の視点から —	杉山 祐子	筑波大学歴史・人類学研究科	190
11	日本の対米黒字は本物か — 社会統計学的見地からの一考察 —	橋本 勝	京都大学経済学研究科	180
12	動物の行動に対するカルシウムの効果：カルシウムによる脳内神経伝達物質合成の基礎的・応用的研究	須藤 伝悦	筑波大学医学系	170
13	減農薬稲作による地域農業再生のための実践的研究	中村 修	九州大学農学研究科	130
14	ミクロネシアの還流的人口移動と多居住地的地帯戦略 — カロリン群島オレイ環礁のライフ・ヒストリー・マトリクスにもとづく調査研究 —	柄木田 康之	筑波大学歴史・人類学研究科	170
15	オーストラリア日系企業の経営管理 — 日本化か現地化か —	エヴァゲロス・テドウシス	グリフィス大学経営学部	160
16	日米ワーカーズ・コレクティブの比較研究 — ポスト産業社会へむけての新しい共同事業体の可能性 —	古沢 広祐	科学史・科学教育研究所	160
17	企業内における人事評価制度の日中の比較	林 新生	九州大学経済学研究科	100
18	日本の祭りに関する文化人類学的研究 — 新潟県佐渡・大川部落のフィールドワーク —	ネリー・コーイ	新潟大学人文学部	150
19	大気汚染物質の積雪中における反応挙動と融雪時の環境影響 — 重金属類の環境循環を中心として —	フランツヨーゼフ・エッカー	金沢大学自然科学研究科	140
20	米国定住日本人の意識とライフ・コース — 日本人の国際化の可能性を探るケース・スタディとして —	池上 英子	ハーバード大学社会学科	180
21	し尿の脱窒処理施設で発生しているガス成分の検索とそのガス化機構に関する研究 — 生体に及ぼす影響に関する予備試験 —	村嶋 君代	熊本県衛生公害研究所	120
22	奄美・徳之島の民俗音楽における伝統と変化の研究 — 音楽文化の創造性の原点を考える —	酒井 正子	一橋大学社会学部	160
23	天然記念物ニホンヤマネの保護のための生存条件の研究とそれによる森林保全への応用および自然保護教育のための教材化	湊 秋作	町立熊野川小学校	160



No.	研究 題 目	研 究 者 名	研 究 者 所 属	助成金額 (万円)
24	アメリカ進出企業の現地人教育訓練に関する研究 — 異文化接触の視点から —	渡 辺 直 登	南山大学経営学部	80
25	後期高齢者の各種居住形態とケア・サービスの現状分析 — スウェーデン南部の一地方自治体を取り上げた事例研究 —	外 山 義	スウェーデン王立工科大学	170
26	人間居住環境創造における企業参加の可能性 — 英国グランドワーク・システムのわが国への適用可能性に関する研究 —	小 山 善 彦	グランドワーク・ファウンデーション	180
27	『甘え』依存性に関する比較研究：日本人とアメリカ人の発想法	バトリシア ・マクドナルド・スコット	統計数理研究所	180

予備的（第II種）研究〔26件；6,800万円〕

28	韓国における失語症患者言語機能診断・評価・治療法の開発研究 — 日本の臨床的方法の適用性の検討を中心に —	朴 惠 淑 他 3 名	延世大学校医科大学附属病院	280
29	アイヌ語を体系的に学習するための「日本語—アイヌ語辞典」編纂にむけての予備的研究	萱 野 茂 他 2 名	アイヌ語辞典編纂委員会	220
30	動物の脳活動のゆらぎ特性から人間行動の原理を学ぶ	山 本 光 璋 他 3 名	東北大学医学部	280
31	日本文化の中の漂泊と漂泊者：漂泊と定着の両義的な関係	ヤコブ・ラズ 他 2 名	テルアビブ大学芸術学部	260
32	遺伝子紋（DNAプリント）に対する医学的・社会的要請と寛容度に関する研究	上 田 國 寛 他 4 名	京都大学医学部	230
33	在日華僑（華人）の中日文化交流への貢献に関する総合的研究 — 福建華僑（福州幫）を中心として —	唐 文 基 他 5 名	福建師範大学歴史系	270
34	日本植民地統治理念の研究 — 朝鮮総督府中枢調査資料に現われた文化政策の考察 —	崔 吉 城 他 9 名	啓明大学	300
35	韓国経済発展に関する歴史的研究 — 日本近代経済史との比較分析を通じて —	中 村 哲 他13名	京都大学経済学部	280
36	ストーマケアに関する研究 — 人工肛門・人工膀胱保有者の日常生活上多発するスキントラブルの対策マニュアルの作成（継-2）	高 屋 通 子 他 3 名	東京都立府中病院	230
37	日本における芸術への助成システム確立のための基礎研究	市 村 作知雄 他 8 名	山海塾	270
38	外国人労働者流入の経済的・社会的影響に関する実証的研究	花 見 忠 他 9 名	上智大学法学部	300
39	日本各地における老人の自立的ネットワーキングに関する基礎的研究	越 谷 和 子 他 4 名	毎日新聞社世論調査部	200
40	在日外国人の受療状況に関する研究	泉 明 美 他 5 名	バイオ21	280
41	西太平洋温帯島嶼における海岸植生-ミズナギドリ系の変遷 — 人為の影響と関連して —	奥 富 清 他12名	東京農工大学農学部	300
42	ケア提供者である女性の健康状態とソーシャルサポート・ネットワークの国際比較 — その予備的調査 —	南 裕 子 他 9 名	聖路加看護大学	270
43	ラテンアメリカ主要国における対日イメージ調査に関する予備的研究	グスタボ・アンドラーデ 他 9 名	上智大学イベロアメリカ研究所	260
44	現代社会における日本人の宗教的態度と生命倫理に関する予備的研究 — 生と死の教育に関する今日的課題を探る —	丸 山 久美子 他 7 名	盛岡大学文学部	160
45	精神遅滞者の進路と就労に関する指導ハンドブック作成のための基礎的研究	松 矢 勝 宏 他 7 名	東京学芸大学教育学部	200
46	地域社会における在宅重症患者のターミナルケアのあり方とその組織的対応に関する研究	西 三 郎 他 7 名	東京都立大学人文学部	180



No.	研究題目	研究者名	研究者所属	助成金額 (万円)
47	日系人及び日本人の循環器疾患とリスク要因に関する疫学調査 — 予備的研究 —	行方 令 他9名	日系コンサーズ	300
48	西南中国少数民族の歴史と文化 — 大瑤山に住む瑶族の音楽と神話についての日中共同研究	長谷川 時 夫 他14名	ミティエーラ美術館	270
49	幕末から明治期における医学諸制度形成過程に重要な役割を果たした人物の事跡ならびにその影響 — 池田謙齋、多仲関係文書を中心に —	酒 井 シ ヅ 他9名	順天堂大学医学部	280
50	ペルー日系社会の実態調査 — 20年後の変貌 —	増 田 昭 三 他5名	東京大学教養学部	300
51	アジアに於ける近代建築に関する基礎研究 — 現存遺産調査(中国)	藤 森 照 信 他18名	東京大学生産技術研究所	300
52	中国都市地域における循環器疾患の疫学と予防対策についての予備的研究 — 日本における体験との比較を通して —	李 天 霖 他7名	北京医科大学公共衛生学院	300
53	風による1,000mレベルからの空撮手法の開発と積雪領域研究への応用(継-2)	室 岡 克 孝 他2名	日本カイトフォトグラフィ ー協会	280

総合(第Ⅲ種)研究〔15件; 9,040万円〕

54	「開かれた学校」のあり方をめぐる教育環境の分析(児童の行動分析を通して)(継-3)	福 富 護 他9名	杉十小学校環境研究会	480 (2年)
55	西太平洋地域における在来型沿岸漁業の比較研究 — 漁船と漁具を中心に — (継-2)	エフレン・フローレス 他8名	フィリピン大学水産学部	1,000 (2年)
56	フィリピン・ネグロス島における経済自立と国際協力の展望(継-2)	西 川 潤 他8名	日本ネグロス・キャンベ ン委員会	470
57	ボゴール博物館と連帯して、インドネシアの自然史研究を推進する計画(継-2)	吉 井 良 三 他7名	ボゴールと連帯する会	650 (2年)
58	インフルエンザ流行伝播に関する研究 — 地域流行の修飾因子について — (継-4)	山 上 修 三 他7名	前橋市インフルエンザ研究 班	280 (2年)
59	熱帯植物の農業活性物質の研究 — インドネシアを中心として — (継-2)	山 本 出 他21名	東京農業大学総合研究所	500 (2年)
60	医療におけるテクノロジー・アセスメントの研究(継-2)	吉 田 忠 他10名	東北大学文学部	600 (2年)
61	野生鳥類における重金属類の生体影響と非捕殺的モニタリング方式(継-3)	本 田 克 久 他7名	愛媛大学農学部	500
62	自然の一体性を重視した地域開発をめざす国際協力の研究 — 日本・ネパールにわたる実践を通して — (継-2)	川喜田 二 郎 他9名	ヒマラヤ技術協力会	720 (2年)
63	アメリカにおける日本製造企業の現地化をめぐる諸問題の日米共同研究 — 自動車および電機企業における「日本的経営」の現地適応可能性 — (継-2)	安 保 哲 夫 他12名	東京大学社会科学研究所	1,150 (2年)
64	人間関係の出発点としての母親のマザリーズと乳児の発声行動の関連(継-3)	志 村 洋 子 他11名	埼玉大学教育学部	420
65	元水銀鉱山労働者・家族の疾病史と生活史に関する労働衛生的・社会学的研究(継-2)	土 井 陸 雄 他9名	横浜市立大学医学部	580 (2年)
66	前近代の日本における職能民の社会と歴史 — 「職人歌合絵巻」「職人尽絵」「洛中洛外図」等の資料学的研究を通じて — (継-2)	網 野 善 彦 他5名	神奈川大学短期大学部	440 (2年)
67	東西技術移転の法的諸問題に関する国際共同研究(継-2)	小 田 博 他7名	東京大学法学部	400
68	母国語の拘束と国際相互理解 — アラブ大学生の現地調査 — (継-3)	黒 田 安 昌 他2名	ハワイ大学政治学部	850

研究助成合計

68 件

20,070



活動記録助成の選考を終えて

活動記録助成選考委員長
縫田 瞳子

今回の申請総数は、56件と過去3回(昭和59~61年度、各44・46・41件)に比べ最も多いものとなりました。これは、この活動記録助成そのものが、回を重ねる毎に次第に広く知られてきたことにもよるでしょうが、今回の伸びは、財団事務局による積極的な公募案内活動に負うところも大だったように考えられます。もっとも、直接案内が送られてきていただいた戸惑われたグループもあったように聞いておりますが…。

さて、今回の申請全体に係わる特徴をまとめると次のようになります。

①記録の対象となるグループの所在地については、東京が16件といつもながら多かったわけですが、今回は全国的に広がりが目立ち、従来あまりなかった西日本や九州が新たに出て参りました。②活動分野については、有機農業・食・リサ

イクルなど、言わば“生活の見直し”に係わる分野が14件と特に多く、また、既成の分類では括りがたい“その他”の分野やいろいろな活動が混在している“複合的な分野”も多くみられるようになりました。③グループの形態としては、そのほとんどが任意団体ですが、これは、本助成プログラムの性格上、当然とも考えられます。④活動歴については、ある程度の年月(5年以上)を経過しているグループが、だんだん増えてきており、今回はかなりの件数を占めるようになっております。

選考委員会では、活動内容や活動歴、他のグループへ与えるインパクトおよび記録作成計画の具体性など、様々な点から、個々の申請につき大変熱のこもった議論がなされました。そして、多くの委員の評価が得られた下記の11グループが、結果として助成の対象となったわけです。

議論の過程で一つの指標となった活動歴の長さについては、今回は特に、グループの安定性や経験の蓄積などの点で、記録としてまとめるためにある程度の長

さが必要とされましたが、活動歴が短くても、極めてユニークで独創的な活動をされている若いグループについては、また別の尺度を設けねばならないような気がしております。

今回、惜しくも採択とならなかったグループにつきましては、今後、十分な活動体験の蓄積や活動内容の広がりを追求されたうえで、再度申請されますことを希望致しております。

☆ ☆ ☆

なお、「記録の出版」については、6件の申請がありましたが、審査の結果、今回は2つのグループが助成対象となりました(他は継続審査中)。今年度分の申請は、12月一杯受付けておりますので、記録を完成されたグループは積極的に申請されることをおすすめいたします。



▲縫田委員長

1987年度 活動記録助成対象一覧(「記録の作成」のみ)

No.	テ	マ	代 表 者 名	共同者数	代 表 者 所 属	助成金額 (万円)
1	大地を守る会の活動に関する記録の作成	— 生活再創造のための新しいネットワーク形成と受け皿づくり —	藤 田 和 芳	他9名	大地を守る会	200
2	水俣病患者家庭果樹同志会の活動に関する記録の作成		高 橋 昇	他10名	水俣病患者家庭果樹同志会	180
3	フレンズ国際労働キャンプ(関西委員会)の活動に関する記録の作成		柳 川 義 雄	他10名	フレンズ国際労働キャンプ	200
4	タイのむらに泉を掘る会の活動に関する記録の作成		甲 田 壽 彦	他11名	タイのむらに泉を掘る会	190
5	薬を監視する国民運動の会の活動に関する記録の作成		高 橋 暁 正	他9名	薬を監視する国民運動の会	190
6	ハスの実の家とハスの実の会の活動に関する記録の作成		関 口 昇	他13名	ハスの実の会	170
7	日本尊厳死協会の活動に関する記録の作成		植 松 正	他6名	日本尊厳死協会	180
8	食べものと健康の集いの活動に関する記録の作成		緒 方 俊 一 郎	他12名	食べものと健康の集い	160
9	美唄消費者協会の活動に関する記録の作成		伊 藤 み え 子	他14名	美唄消費者協会	160
10	地域ケアへの歩みとそれを担ったインフォーマルグループの活動に関する記録の作成	— 日野市の事例を中心にして —	木 下 安 子	他13名	日野市地域ケア研究所	170
11	真間川の桜並木を守る市民の会の活動に関する記録の作成		平 松 南	他10名	真間川の桜並木を守る市民の会	160

活動記録助成合計

11 件

1,960



1987年度 国際助成対象一覧

インドネシア [17件; 2,499万円]

注: プロジェクト名末尾の継-2(3)は、継続2(3)年目を示す。

No.	プロジェクト名	代表者名	代表者所属	助成金額 (万円)
1	リアウ地方の口承文学: 内陸部住民のニヤニイ・パンジャン	トゥナス E. 他2名	リアウ州立伝統文化会館	64
2	スラウェシ南部の沿岸地域の社会(継-2)	ムフリス 他10名	ハサヌディン大学	417
3	スルック: ジャワのイスラム教徒の神秘詩	シムフ 他4名	スナンカリジャガ・イスラム高等学院	89
4	バリの歴史関係貝葉文献の翻字, 翻訳(継-3)	A.A.G.P. アグン	ウダヤナ大学文学部	49
5	ミナンカバウ社会における近代的官僚制と伝統的権威(継-2)	イムラン M. 他1名	ミナンカバウ文化研究財団	58
6	ミナンカバウ語に特有の語彙, 連語, 表現の研究(継-3)	ハイディル A. 他3名	ミナンカバウ文化研究財団	86
7	ブル島の孤立した民族ワカホロ族とその世界(継-2)	ムス H. 他2名	バティムラ大学教員養成学部	88
8	アチェの封建領主ウレーバランの歴史研究(継-2)	ルスディ S.	シャクアラ大学教員養成学部	45
9	アチェのタルサン国のスルタンのイスラム法学者ジャラルディン・ビン・カマルディンの著作に見られる裁判官についての考え方	T. モハマッド J.	シャクアラ大学法学部	45
10	H. アブドゥル・カリム・アムラー・アドグナウィの著作に関する研究	モハマッド S. L. 他4名	西スマトラ・イスラミックセンター	62
11	東南アジアのイスラム(継-3)	タウフィック A. 他2名	インドネシア科学院社会文化研究所	79
12	バリの伝統医療関係貝葉文献の目録作成	I. K. スウィジャ 他2名	グドンキルティヤ貝葉博物館	58
13	北アチェの工業開発にともなう周辺社会の文化変容(継-3)	ダヤン D. 他9名	シャクアラ大学社会科学開発センター	296
14	インドネシアの諸民族言語との関連におけるインドネシア語の利用と発達	E.K.M. マシナンボウ 他6名	インドネシア大学文学部	343
15	スダ地方文献のマикроフィルム作成(継-3)	エディ S. E. 他9名	バジャジャラン大学研究センター	378
16	19世紀ジャワの強制栽培制度に対する農村の反応(継-2)	ジョコ S.	ガジャマダ大学文学部	206
17	ブギス・マカッサル文字タイプライターの製作と寄贈(継-2)	サラフディン	南スラウェシ州政府	136

ラオス [4件; 435万円]

18	貝葉文献の保存, 記録, 翻字, インヴェントリー作成, マイクロフィルム化に関するセミナー	ラタナウォン H. 他2名	芸術・文学研究所	210
19	ラオス伝統医療のマニュアル作成	ソムモニ P. 他1名	マホソット病院	86
20	国立美術学校用の教科書の編集・印刷	ルク S. 他3名	国立美術学校	40
21	国立音楽舞踊学校用の教科書の編集・印刷	ボウパチャン K. 他2名	国立音楽舞踊学校	99



(\) 家族との人間関係の歪みの構造が、実は一般に問題となっている家庭崩壊のそれとも深い関連があることも指摘されているなど、障害者はむろん、一般健常者にとっても示唆に富む内容が多い。

『唇裂・口蓋裂はどこまで治る』

一色彦彦, 川野道夫・著

アカデミア出版会・刊

A 5判 並製 178頁, 1,800円

唇裂や口蓋裂は、上口唇や口蓋が先天的に割れている疾患で、その発生頻度は500人に1人と言われている。近年これらの治療については、かなり満足のいく結果が得られるようにはなっているが、中には必ずしも良い治療を受けてきたとは言えない患者も多数いる。

本書は、こうした不十分な治療を予防し、良い治療結果をもたらすために、あくまで患者の側に立ったうえで、多くの専門家や家族を対象に、唇裂や口蓋裂に伴う障害とその治療や教育の全体像をわかりやすく紹介している。なお、本書のもとになる研究に対しては、当財団より'80, '81年度に研究助成が行われた。

身近な環境をみつめよう

第5回研究コンクール・公募開始

トヨタ財団では、標記のコンクールに関する公募をこの11月1日より開始する。

テーマは身近な環境に関することならなんでもOK。主婦、学生、専門研究者、等々だれでも参加可能。チームを組んでご応募いただきたい。研究費は1チームにつき400万円。2年間の研究活動のために、7~8チームに対して助成を行う。

その2年間ですぐれた研究成果をあげたチームを表彰し、特に長期的な活動が期待されるものには、研究奨励基金などを贈呈する。詳細については、研究コンクール係までお問合せを。

なお、資料請求の際は、送料分の切手(1部:240円, 2・3部:350円)を同封のこと。

最近の報告書から

当財団の助成研究から、「成果発表助成」によって印刷された報告書を紹介します。入手ご希望の方は、送料分の切手を同封の上、財団レポート係宛てお申込み下さい。(品切れの際はご容赦の程を)

I-022 交通計画における予測の事後評価に関する研究

(交通予測事後評価研究会 代表・新谷洋二, B 5 170頁 和文, 送料 250円)

客観的なデータと統計的手法を用いた科学的な交通計画手法がわが国に適用されるようになってから30年近くになるとする。この研究は、かつての予測や計画がその後どのような形で実現していったかを事例に即して評価し、今後のより合理的な計画方法の確立のためにフィードバックしようとするもの。

扱った事例は、広島都市圏交通計画、桃花台新交通システム計画、ユーカリが丘新交通システム計画、小樽臨港線道路計画の4件、いずれも今回の研究グループがかってその計画に携ったもの。「計画学」についての多くの示唆を含む研究報告書である。

006 BURMA AND JAPAN - Basic Studies on Their Cultural and Social Structure (ビルマ研究グループ 代表・奥平龍二, B 5 312頁 英文, 送料 300円)

日本とビルマ両国間の学術交流を一層頻繁にし、相互理解を深めることを目的に設立された「ビルマ研究グループ」は、'83年度の研究助成を得てビルマに関する基礎研究を行い、その成果は『ビルマ関係邦語文献解題及び目録』(1868-1985)や『本邦ビルマ語文献仮目録』として刊行された。'84年度には更に2ヶ年の助成を得、初年度の研究をより具体化する(各メンバーにより各々の分野にお

るビルマ研究を深める)努力が払われた。

当報告書は、その一環として'86年8月末に開催された“シンポジウム「ビルマと日本の研究交流促進のための基礎研究」”の参加者による発表をとりまとめたものである。

005-2 中国干旱地区沙漠化的成因和動態解析(預略性調査)一毛烏素沙地一

(内蒙古沙漠開發研究会, B 5 106頁, 中文, 送料 250円)

本レポートNo.41で紹介した『中国の乾燥地における沙漠化の機構解明と動態解析(予備調査)一特に毛烏素沙漠において一』の中国語訳。

経過報告会のお知らせ

- ・11/6 (金) 1986年度 研究助成・総合(第Ⅲ種)研究
- ・11/28 (土) 第4回研究コンクール・本研究
- ・11/29 (日) 研究コンクール特別賞受賞グループによる研究報告と交流の集い

◎場所は、いずれも国際文化会館(東京六本木)。お問合せは研究助成係まで。

編集後記

◆うだるような暑さが過ぎ去りホッとしていると、もう枯葉の舞い散る季節となりました。今回は“助成決定特集号”。ご覧いただいた感想はいかがなものでしょうか?

◆研究助成は相も変わらず狭き門。熱心なご申請をいただいたにもかかわらず、またまた多くの方々のご期待に沿えぬ結果となり申しわけなく思っております。

◆日タイ修好100周年記念の関連事業は、国際文化会館をはじめ多くの関係者や機関のご協力により無事終了することが出来ました。改めて感謝申し上げます。

トヨタ財団レポート No.42

このレポートを継続してご希望の方は、お葉書にて財団宛てお申し込みください。

発行日 1987年 10月31日

発行所 財団法人 トヨタ財団

発行人 山口日出夫

編集人 渡辺 元

印刷 真友工芸株式会社